

# ミュージアム 通信

第2回小企画展

## 「江戸の婚礼」

[資料室談議 第3回]

『容顔美艶考』より抜粋・解説  
「嫁御寮のけはひ」

[新商品のご紹介]

人生最良の日に伝統の紅を  
小町紅『婚礼』



「婚礼色直し之図」(部分)・一勇斎国芳・国立国会図書館蔵

## 第2回小企画展 「江戸の婚礼」 5/15～開催

現代と似て非なる  
江戸の婚礼諸相

江戸時代の男女はどのようなして出会ったのか。当時の式の段取りはどうだったのか。花嫁メイクのポイントとは？

伊勢半本店紅ミュージアムでは、五月十五日より「江戸の婚礼」展を開催中。今日のような結婚情報誌がなかった当時、世の女性は往来物などに事細かに記された婚礼作法を熱心に読んだ。

そもそも婚姻法からして武家と庶民とはまったく区別されていた当時、婚礼の様相は身分によって大きく違った。また、対等の家柄同士で相手を選ぶ傾向が強かったため、現在よりも仲人の役割が重要な位置を占めていた。事実、商売としての仲人が登場するほどその存在が目立ち始めるのは江戸時代からであった。

## これが 婚礼モデルケース

では実際に、往来物に記されている婚礼の図式を見てみよう。

まず見合いが行われる。その結果、両者が納得すれば結納となり、挙式。式の翌日、親戚連中に嫁の顔見せを行い、さらに五日後、早くも嫁の里帰りという運びになる。

右の流れは、挙式までは一見現代と大差なく思われるが、果たして実態はどうだったのだろうか。



「春信婚姻之図」(部分)・国立国会図書館所蔵

## 検証その一、見合い

上図は江戸時代の見合い風景を描いた「春信婚姻之図」(鈴木春信・国立国会図書館所蔵)である。

さて、「見合い」といえば、男女が向かい合って座るイメージが強い。しかしこの図を見ると、そんな様子はまったく窺えない。一体どのあたりが見合いなのか。

実は今まさに見合い中なのだ。江戸時代の見合いとは、人の賑わう往来を過ぎる瞬間に行われたのである。

見合い会場として頻繁に使用されたのは茶屋の店先だった。図の中央にいる坊主頭が仲人、その右側、扇子を持っている男性がこの見合いの主役の一人。そして、この二人の前を通り過ぎようとしている集団の中、先頭を行く振袖姿の娘がもう一人の主役である。

ここに描かれているように、当時の見合いとは茶屋の店先などを通り過ぎる一瞬に相手を盗み見る、いわば「チラ見」の間そのものを言った。一瞬にすべてを賭けた、現代より相当スリリングなものだったのである。

## 検証その二、結納

「婿が嫁の両親を前にご挨拶」というのが現代の結納の図式だが、江戸時代にあつては、結納引渡しの際に婿・嫁の姿は見えない。結納は婿側の使者と嫁側の請取人との間で行われるものだった。

## 検証その三、挙式(祝言)

式場予約はお早めに、そんな必要のなかった当時。それというのも、式場が婿宅だったからだ。

挙式時間は夕方から夜半にかけてが多く、祝言の場のいわゆる席辞表も現代とは少々違う。新郎新婦は隣同士に座らず、

嫁が主座・婿は客座にいた。両人は媒酌人や高砂台などを挟んではすむかいに座った。



「春信婚姻之図」(部分)・国立国会図書館所蔵

座が調うと三々九度となる。まず婿が三献飲み、

次いで嫁が三献。次は嫁から三献、それに婿が続いて三献。そしてもう一度婿から三献、続いて嫁が三献。このように盃が三順したところで三々九度完成。これを式三献(しきさんこん)といった。

式三献の後、新郎新婦

は色直しのため一時退席。色直しといっても現代のようにバリエーションに富んでいたわけではない。嫁は婿から贈られた赤の小袖に、婿は嫁から贈られた小袖に着替える程度。そして色直しが終わったら、今度は嫁と相手側の家人、すなわち舅姑とで式三献が交わされる。嫁入りのご挨拶をするというわけである。

なお、この途中には舅姑それぞれから引出物が嫁に渡された。今とは引出物の意味も対象も異なっていたのである。

このように、江戸時代の婚礼図式には、現代と似て非なる点が多々見られる。「江戸の婚礼」展では、上述のほか、江戸の花嫁の式当日スケジュールや式後のお約束事などが概観できる。

# 『容顔美艶考』より抜粋・解説 「嫁御寮のけはひ」

く花嫁メイクのポイント



『容顔美艶考』(ようがんびえんこう)とは、文政二年(一八一九)刊行、並木正三著、浅野高造補。「乾」「坤」の二冊から成る化粧読本。季節毎や世代別の化粧に加え、花見や舟遊び、芝居見物時などTPOに沿った化粧も紹介している。また、顔の造作をフォローする化粧法も記す。

## 今

回は『容顔美艶考』から、「嫁御寮のけはひ(化粧)」を紹介する。



「婚礼色直し之図」・一勇斎国芳・国立国会図書館所蔵  
中央の花嫁が白無垢から赤地の盛装に着替えるところ。  
花嫁メイクは、この盛装に負けないよう意識したものであった。

「よめ入の夜の化粧はあつうなざる、がよし。其故は、よめ入りの夜のはれの御小袖の白むくより色直しは、ぬいはくをまじへ、金入のをりものをめすにより、うすきけしやうにてはとりあひわるし。扱(さて)第一の御こ、ろへは両み、の中とみ、のまへうしろをずいぶんでいねいに白粉をなざるべし。其夜はぜひはづかしうおもふものゆへ、とかく横向に成なざるゆへ、耳の中が人の目におもにかゝり、又いづれ上気するものなれば、み、やほうのあたりが真赤になりますれば、何ぶんあつきけしやうがよし。扱また、御心得の第一は、むこ君と一所におしづまるとき、

むこどのよりはすこし引下て横におなりなされて、むかふから見おろし、手前よりは見あげるやうになざる、時は、はなの穴が見へぬゆへ、おかほのかつかうがよく見へます。又袖にてかほをおほふものはなの穴を見せぬ為とおぼして、かならずはなの穴の見へぬやうになされかし。鼻の穴が見えるのは、はなはだ見とむなきもの(中略)なり。又身仕舞のひまなき折ならば、耳のうしろ鼻のあたりを、まゆはけにてうすくはき、**口紅粉をきっぱりと付るがよろし**」

赤字部分が花嫁メイクのポイントである。まず、徹底しているのは厚化粧に仕上げるという点で、それはハレの衣装に顔が負けないためである。また、第一の心掛けとして、耳の中と前後には白粉を「ずいぶんでいねいに」塗ることを挙げている。式当日は恥ずかしさや緊張から耳・頬が真っ赤になつてしまふものだから、それを隠すための厚化粧でもあつたようだ。

第二の心掛けは、くれぐれも鼻の穴を隠すことだという。鼻の穴が見えるのは非常に「見とむなき(みつともない)もの」であり、したがって鼻の穴が見えないようなアングルまで指示している。そして最後に、**口紅は「きっぱり」付けること。**これで美しい花嫁の完成である。

(注) ※「御寮」とは貴人やその娘・妻などに対する敬称で、近世以降、中流の町家の娘なども指した。

小町紅『婚礼』



小町紅『婚礼』赤玉瓔珞文紅猪口



小町紅『婚礼』唐花纹紅蓋物

日本において「赤」は、古くから魔を祓う神聖な色とされてきました。中でも紅花から抽出される赤、つまり紅は、女性の通過儀礼や年中行事に用いられた特別な色。誕生・お宮参り・雛祭り・七五三・婚礼・還暦といった女性の節目を彩ってきました。その理由は、古来、血の巡りをよくすると信じられていた紅が、女性の体を病気から守る薬とみなされてきたことに関係があるようです。また、紅は吉事の証としても重用されてきました。婚礼では、花嫁化粧のほか、紅花で染めた紅絹（もみ）をつのかくしの裏に配すなど、まさに女性と共にあった色なのです。

—人生最良の日に伝統の紅で粧う—そんな古式ゆかしい習慣を今に。伊勢半本店は、小町紅『婚礼』を五月十五日より新たに発売いたします。

小町紅『婚礼』は、ご両親様からお嬢様へ、ご祖父母様からお孫様へなど、祝いの品としてお贈りください。器は、国の重要無形文化財にも認定される名窯「今右衛門窯」が、「寿（ことほぎ）」をテーマに制作した伊勢半本店だけのオリジナル品です。三百年の歴史の色鍋島・今右衛門の伝統の技と、江戸時代の製法を守り続ける伊勢半本店の紅作りの技が融合した、伝統美溢れる世界を、どうぞお楽しみください。

Information

かわら版

イベント & 講座のご案内

■「和のしつらい講座～夏のしつらいを楽しむ～」

「しつらい」とは、室内の調度品を四季折々の変化に合わせて調える習わしのことです。本講座では、「七夕」を題材に夏のしつらいを実践的に学びます。

要予約・定員20名・材料費2,500円  
2007年6月30日(土)午後2時～4時

■日本の赤「紅」を知る

紅の色って？ 紅を点すって？ 普段「紅」に触れる機会がない方に、試していただくための講座です。

要予約・定員8名・参加費無料  
2007年9月1日(土)午後2時～3時半「秋色メイク」

※内容・申込詳細は、ホームページに掲載いたします。

開催中の企画展「江戸の婚礼」

※常設展と併催

2007年5月15日(火)～7月16日(月) 入場無料

常設展では、紅の歴史や文化を、浮世絵や化粧及び紅製造道具の展示を通して解説します。

Since 1825

伊勢半本店  ミュージアムのご案内

●開館時間／午前11時～午後7時 ●休館日／毎週月曜日 ●入場無料  
(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL&FAX:03-5467-3735  
東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehan.co.jp>